

ライフケアガーデン熱川 別館

症 例 概 要 入居者：70代 男性 要介護2

病名：パーキンソン病、虚血性心疾患（ステント留置）、易怒性亢進、慢性胃炎、糖尿病、統合失調症、アルツハイマー型認知症、高血圧、心不全、便秘症

S県内にて消化器外科医師として勤務。定年退職後は地方の病院にて勤務。2006年、パーキンソン病と診断され投薬治療を開始する。2020年から易怒性亢進を認め、職場で怒鳴ることが増えたため職員に抑止されていた。ご家族が様子を見に行くと息子を認識できず杖で殴りかかることがあり、病院に入院となる。退院後は自宅のあるS県内かつ医療面で安心して生活できる施設への入居をご本人とご家族が希望し、約10カ月前当施設へ入居となる。

内 容

毎日の生活の中で身体が自由に動く時間と動かない時間があります。動く時間帯は自分で移乗や排泄等を行ない、できない時間帯は職員が介助することで対応しています。

身体が動かない時間帯は活気がなく不穏となります。自分の思うように動くことができない苦しみと、少しでも早く介助をしてほしい要望から感情的になることが度々ありました。

時には「もうだめだ。死んでしまいたい」と泣きながらマイナス発言をしたり、職員に対して暴言もみられました。その都度傾聴し、お話することで落ち着きを取り戻されました。

身体を動かすことで不穏の軽減につながり、活気のある生活が送れるようレクへの参加を促しました。時代劇好きということから敬老会では職員との剣劇を企画し、居合道経験者の職員と迫真のチャンバラをみせて会場を大いに盛り上げました。運動会では身体の動かない時間帯ながらも、玉入れや風船リレーに一生懸命参加されていました。

身体を動かすことによって少しずつ利用者さんに活気が戻り、職員に医師だった頃の思い出を話してくださるようにもなりました。そこで、他入居者さんに向けた医療講演会の開催を提案しました。海外を含めこれまで500回以上医学や医療に関する講演をしてきたという利用者さん、皆のためになるならと張り切って資料を準備します。ご自宅から現役時代のスーツを取り寄せ白衣を用意しました。白衣を着て皆の前で講演する姿は凛々しく堂々としていました。質疑応答にもハキハキと対応します。参加された他入居者さんはいつもと違う利用者さんの様子に驚くとともに普段聞くことのない医療講演を真剣に聞き入っ

ていました。最後に大きな拍手を受け、講演会は大成功でした。

会場を後にして「実は緊張していたんだよ」と照れ笑いする利用者さんの表情には活気と自信、喜びが満ち溢れていました。

その後も利用者さんは積極的にレクへ参加し身体を動かしています。また、第2回の講演内容を楽しそうに考えるなど活気のある生活を送っています。

入居者さんが身体を動かすことによって活気を取り戻し、その人の人生経験を活かした企画を提案することでキラキラとした笑顔が生まれる事例となりました。